

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

昔話をひとつ。

1993年8月21日。今から22年前の夏。国立競技場。

蒸し暑さが少し抜け、夜の帳が降りはじめた夕刻。私は市川FCスタッフと共に、胸を躍らせてJR千駄ヶ谷駅の改札を抜け、国立競技場千駄ヶ谷門に向かっていました。見上げると、国立競技場のカクテル光線が夜空に映え、照明塔の輪郭がはっきりと見て取れます。はやる気持ちを抑えつつ、千駄ヶ谷門をくぐりましたが、入口へ向かう緩やかな坂道を進む頃には自然とまた、急ぎ足になってしまいました。今までも何度か観戦のために、同じ道順で国立競技場へ足を運んでいましたが、この日はやはり全く違う高揚感でいっぱいでした。

国立競技場のメインスタンドに入るとカクテル光線に包まれた、眩いばかりのグリーンのピッチが目に入り込んできました。ピッチ上では、U17 世界選手権（現在のFIFA U17ワールドカップ）に初出場したU17 日本代表が、初戦のガーナ戦を前にウォーミングアップをしています。この時のU17 日本代表メンバーは、右のとおり。後にJリーガーや日本代表となる若き逸材ばかりです。

中田英寿、宮本恒靖、松田直樹、戸田和幸らがこの後、日本を代表する選手となっていきますが、この日の主役は、**背番号10 財前宣之** でした。

5年前。小学校を卒業したばかりの子が、U17の中心選手として、国立競技場で代表のユニフォームを纏い、国立の天然芝のピッチでアップを繰り返している。

彼の活躍は、サッカー雑誌等で知ってはいましたが、国立のピッチで目のあたりにし、私の興奮は頂点に達しました。今でもそうですが、その当時から彼のあだ名は「ザイ」。17歳の教え子に向かって、「ザイ～」と声援を送ったのをはっきり覚えています。

財前君は小学校3年生の時に、北海道室蘭から父親の仕事の関係で市川市立南新浜小学校に転校してきました。4年生から南新浜FC（南新浜小のサッカー部）に所属し、市川FC（市川トレセン）にも選ばれ中心選手として活躍しました。小学校の時の彼は、とにかくうまい子でした。そして、とにかくサッカーが大好きでした。ドリブル、トラップ、パス。すべての技術が4年生の時にすでに6年生と同じかそれ以上でした。朝起きたらすぐにサッカーがしたかったので、朝練に遅れることはありませんでした。彼のポジションは主に、FWかMFでしたが、DFを抜き去りGKと1対1になったら、必ずといっていいほどゴールを決めていました。また、スルーパス

1993年 U-17世界選手権 出場メンバー			
No.	Pos.	選手名	所属
1	GK	伊藤卓弥	横浜マリノスユース
2	DF	長田道泰	読売SCユース
3	DF	松田直樹	前橋育英高
4	DF	鈴木和裕	市立船橋高
5	DF	宮本恒靖	ガンバ大阪ユース
6	DF	橋本淳	東北学院高
7	FW	吉田孝行	滝川第二高
8	MF	一木太郎	読売SCユース
9	FW	坂井浩	四日市中央工高
10	MF	財前宣之	読売SCユース
11	FW	中田英寿	蕨崎高
12	GK	小針清允	読売SCユース
13	MF	石本慎	沼田高
14	FW	船越優蔵	国見高
15	MF	佐伯直哉	読売SCユース
16	FW	藤田聡	徳島市立高
17	MF	戸田和幸	桐蔭学園高
18	FW	家治川卓也	高槻南高

を出すのが大好きで、常にDFの裏を狙っていました。というか、受け手の技量、スピードに合わせて工夫してパスを出し、**スルーパスを通すのを楽しんでいる子**でした。

小学校卒業後は、学校は地元の福栄中に進みましたが、サッカーは読売サッカークラブジュニアユースに合格し、そのまま読売サッカークラブユースに進んでいました。

さて、ガーナ戦。この大会は試験的に、「スローイン」に代わって「キックイン」が採用された大会でした。ゲームをよりスピーディーにするというFIFAの狙いから、この前年にはいわゆる「キーパーへのバックパス」が禁止され「キックイン」もその一環として、この大会で採用し、データをとり、その是非を判断するつもりだったようです。

U17日本代表の小峰監督(国見高校)は、キックインのルールとして相手は9.15m離れねばならず、ほとんどフリーキックと同じ状況となるため、キッカーを決め、ゴール前に長身のFWを置いて得点を狙う作戦を立てました。日本のキッカーは財前、長身のFWは船越(国見高校)でした。財前のキックは確かに正確なので、ほぼ船越の頭に行くのですが、この繰り返しではなかなか得点には結び付きません。私は観戦しながら、財前の良さはこれじゃないとつぶやいていました。**ゲーム中に長短織り交ぜたパスを自在に操っている姿こそ、子どもの頃の財前が成長した姿そのもの**でした。後日になって知ったことですが、この時左サイドを何度も駆け上がり、財前からのパスを受けて、強烈なシュートを打っていたのは、中田英寿でした。

日本はガーナ戦を0-1で惜しくも落としますが、続くイタリア戦を0-0で引き分け、メキシコに2-1で勝利し、リーグ2位で通過するも、準々決勝で優勝するナイジェリアと対戦し1-2で敗れ、ベスト8という結果でした。ナイジェリアにはカヌー、イタリアにはブフォン、トッティーと、今思うとすごい相手と戦い見事なベスト8だったと思います。

1993年。この年は、色々な意味で、日本サッカーの大きな転機となった年だと思います、5月にはサッカー関係者念願のJリーグが開幕し、8月にはこのU17世界選手権、そして10月には、あのドーハの悲劇が続きます。

これからはサッカーの時代だと、多くのサッカー関係者が胸を躍らせた年だったと思います。そして、次の全日本の主役は財前と、私だけでなく多くのサッカー関係者が思った年だったと思います。

その後の財前選手は、ヴェルディ川崎の時代に18歳で最初に靭帯を断裂してしまい、その半年後、スペインリーグデビュー直前に2度目、そして、22歳で3度目の靭帯断裂と、伸び盛りの時に故障に泣きました。それでも、苦難を乗り越え、ベガルタ仙台、モンテディオ山形では、いずれもJ1昇格に貢献し、2010年から2年間は活動をタイ・プレミアリーグに移し、17シーズンをプロの現役選手として全うし、35歳でスパイクを脱ぎました。全日本には一度も招集されませんでした。私にとって**彼は誇りです**。

2年前「**ハード・アフター・ハード**」(著者:大泉実成 発行者:(株)カイゼン)という本が出ました。サブタイトルが「かつて絶望を味わったJリーガーたちの物語」。1993年にU17に出場した選手の軌跡を追った作品です。

今夏これを読み返し、私もいささか齢を重ね少し感傷的になり、小学生の時の「ザイ」のスルーパスを思い出し、昔話を語らせていただきました。